

中学生の英語・英語学習に対する信念の解明
— 動機づけの期待理論に基づく英語4技能間の比較 —

矢島裕文／島田英昭・田中江扶・鈴木俊太郎

研究概要

本研究は、学習行動に影響することが知られている英語学習の信念（belief；例：英語は努力すれば話せるようになる）について、中学生を対象に明らかにする。近年の英語教育では「話す・聞く」が重視されており、「読む・書く」を加えた4技能で比較する。研究チームはこれまでの研究で、大学生・ビジネスパーソンを対象に4技能の信念を比較した。本研究は、それを中学生に拡張して調査する。これにより、中学生の主体的学びを支援することを目指す。

研究目的

英語力の向上には、主体的学びが不可欠であるが、本研究は学習行動に影響する要因の一つである信念（belief）に着目する。たとえば、「英語はセンスがなければできない」という信念を強く持っていれば、英語の勉強をしなくなると予想できる。これまでの英語・英語学習に関係する信念研究は、(1)日本人の英語・英語学習の特徴を把握し切れていない、(2)英語の4技能（聞く、話す、読む、書く）が区別されていないという問題がある。

本研究は、これまでに研究チームが上記の問題意識に基づき挙げてきた成果をベースとして、それを中学生に拡張して実施するものである。

計画・方法

研究チームはこれまでに、以下の研究を行っている。

- 動機づけの期待理論を基礎として、大学生とビジネスパーソンを対象に質問紙調査を行い、英語・英語学習に関する信念を3因子（努力期待、能力期待、価値期待）に分けた。
- 3因子の中で動機づけに影響する因子は、努力期待（例：英語の勉強をしっかりとすれば英語が実用的に使えるようになる）、能力期待（例：英語をいくら勉強しても、才能がなければ上手にならない）であることを明らかにした。
- 3因子を4技能ごとに測定し、信念の強さを相対的に比較した。たとえば、能力期待は「話す・聞く」が高く「読む・書く」が低いという実態を明らかにした。

本研究は、上記を中学生を対象に拡張する。以下の計画で行う予定である。

- アンケート形式の調査項目を、中学生を対象とした調査にふさわしい表現に調整する。その際、中学生の英語教育現場と英語教育学（矢島）、言語学（田中）、心理学（島田、鈴木）の異分野の知見を組み合わせながら、評価の内容妥当性（テスト理論における妥当性の一つ）を高めることを目指す。
- アンケート冊子を作成し、調査を実施する。
- 調査結果を統計的に分析する。

予想される結果と意義は、以下の通りである。

- 大学生とビジネスパーソンを対象に行った一連の研究と同様の因子構造が得られると考えられる（構造的妥当性の確認）。
- 大学生・ビジネスパーソンと同様の、信念の4技能間の相対的な違いがみられると考えられる。ただし、中学生は日常的に比較的長い時間の英語学習環境に置かれていること、受験等の社会的イベントがあること等の要因から異なった結果が得られる可能性があり、探索的研究としての意義もある。
- これまでの研究から、努力期待を高め、能力期待を下げることで、主体的学びにつながると考えられる。本研究が明らかにする4技能ごとの努力期待、結果期待の強さから、変容すべき信念を特定することができる。本研究の成果は、それらの信念を具体的に変容させるアプローチの開発につながる。